波間の休息

老老介護問題の緩和となる建築アプローチ

弓塲 教行　環境・プロダクトデザインコース　藤田研究室

製作背景

日本は 2007 年から超高齢社会に突入しており、今後さらなる高齢化が進んでいくことから、日本の介護福祉業界では、老老介護が問題とされている。老老介護とは、65 歳以上の高齢者が同じく 65 歳以上の高齢者を介護することを指す。身体的・精神的な負担が大きい介護を高齢者が担うのは好ましくなく、認認介護や共倒れ、虐待などの重大な問題に発展する危険性がある。特別養護老人ホームなどの介護施設に入所しようにも、入所待ちなどの問題から入所できないケースも少なくない。

計画敷地の概要

敷地は、和歌山県西牟婁郡白浜町の銀座通りを含む道路に沿った場所である。白浜町は、白良浜や白浜温泉、アドベンチャーワールドをはじめとした観光資源が豊富な町で、平成 30 年の観光客総数では県下 3 位、宿泊客数では 2 位の和歌山市を大きく離して県下 1 位である。その一方で、老年人口割合(65 歳以上の割合)は増加しており、全国平均と比べても 10%以上高い。

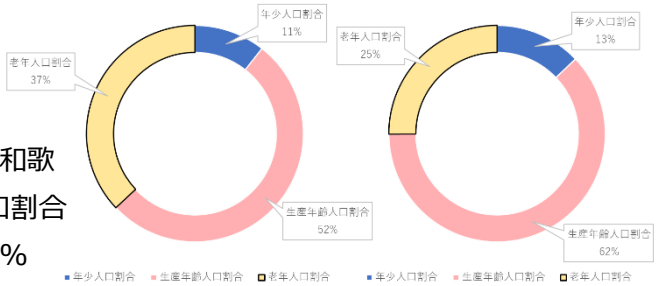

図 1 平成 27 年 年齢別人口割合 左:白浜町 右:全国

計画地の南北には住宅街が、東西には浜と湾がある。道路は山に挟まれており、計画敷地自体もゆるやかな傾斜を含む。ゆるやかな傾斜は移動にわずかな負荷をかける土台となる。道路の道幅は狭く歩道もないので、歩行者が自動車の接近に気づいて端に寄る場面がよく見られ、高齢者が安心して歩けるスペースが必要である。

図 2 銀座通りと狭い道路幅員

ソフト的アプローチ

労働とレスパイトケアが必要である。労働には同僚をはじめとした　というメリットがある。レスパイトケアとは、デイサービスやショートステイなどの介護サービスを利用し、介護者が休息できる時間をつくることを指す。

このふたつを合わせてワーキングレスパイトケアをソフト的アプローチの鍵とする。ワーキングレスパイトケアでは、介護者は介護アシスタントとして働き、その間つきっきりの介護から離れることができる。また、介護スキルの向上と経済支援のほかに、職場のネットワークを構築することで、独りで介護する状況から遠ざけることにつながる。

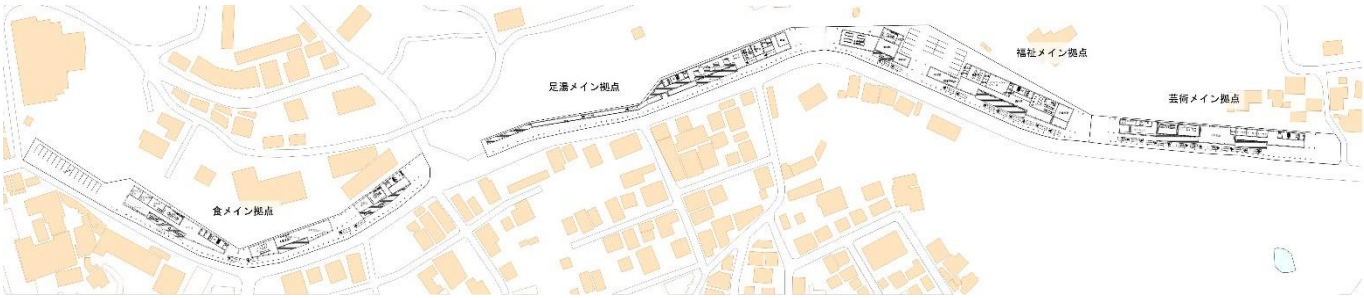

図 3 計画敷地全体図

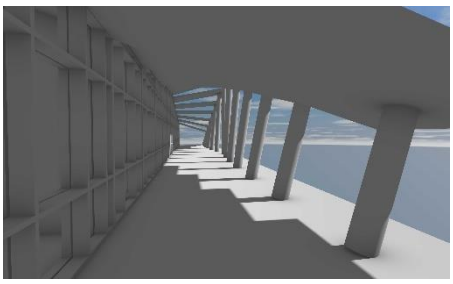

図 4 支柱による連続性

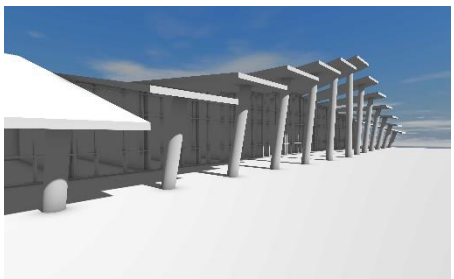

図 5 道なりのファサード

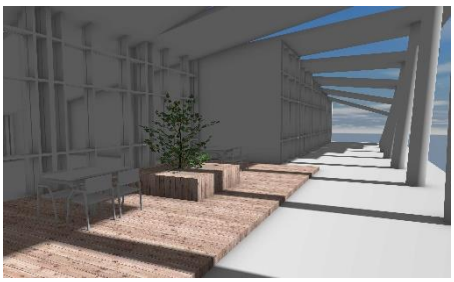

図 6 アプローチと休憩のデッキ

ハード的アプローチ

移動を促すために、道路に沿って連続する空間を提案する。日常的に歩行することで高齢者(介護者と要介護者)の生活レベル向上を図る。施設の流動性を上げることで、地域住民や観光客と接する機会を多く設けることができ、活動を活発化させられる。

また、軒下のパブリックスペースを道路に沿って設けることで、地域の動線を巻き込む。

設計プロセス

道路に沿うように歩道を配置し、歩道に隣接するように拠点を置く。デッキを設け、拠点への自然な流れを作り出す。内外をつなぐセミパブリックなスペースかつ、歩き疲れた時に休憩できる場となる。

拠点は 4 つに分け、各拠点にメインとなる活動を割り当てた。また、拠点には他の拠点の機能の一部を取り入れている。拠点同士の関わり合いが生まれ、拠点間移動のきっかけになる。

まとめ

高齢化の進行により、老老介護問題は今後ますます深刻化する。本研究に取り組んで、これを緩和するには人的ネットワークを活用し、負担を分散・解消することが重要だと感じた。

ワーキングレスパイトケアによる負担軽減とネットワークの構築、地域の動線と拠点利用者の動線を重ね合わせることで生まれる交流、連続性が促す移動によって身体的能力の向上をねらう本案が、老老介護問題に対するひとつの切り口となれれば嬉しく思う。

出典 図 1: 統計ラボ(https://ecitizen.jp/)、e-stat(https://www.e-stat.go.jp/)